結ぶ、つなぐ、組ひもの魅力

板橋区立板橋第四小学校６年　矢崎（やさき）　煌（ひかり）

ぼくは、４年生の時に総合の授業で組ひもを使ってストラップやミサンガを編みました。特にミサンガは、７色のししゅう糸を使い交互に編むととても美しい丸ひもになるのでぼくは嬉しくて、糸を買ってもらい家でも編んで家族にプレゼントしました。組ひもは日本の伝統工芸の一つと知り、注意して見てみると身の回りに組ひもが使われているものがいくつもみつかり興味を持ちました。

まず家の中でみつけたのは、お菓子を結ぶひもや紙袋の持ち手、お守り、五月人形のかぶとの緒です。お盆で祖母の家に行くと、お仏壇の前のみすのところに組ひもをみつけました（写真１）。お花の形に結ばれていました。それはお守りについているのと同じ結び方でした（写真２、写真３）。さらに、お墓参りに行ったお寺には本堂の入口に幕がありそれを結びあげているのが組ひもでした（写真４）。組ひもはものを縛ったり、つないだりする用途で使われることが多いけれど、結んであるものは結び方に種類があり何か意味を持つのかもしれないので調べることにしました。

組ひもは、１本の糸や麻などのひもから、２本のひもをねじりあわせたよりひもであるなわを経て、何本かのひもを組み合わせたものへと発展してできました。中国からもたらされ、仏教の伝来に伴うお経の巻物や袈裟、貴族の礼服の添帯、さらに武士の台頭による兜や鎧の縅糸や刀の柄巻など多方面に活用されてきたそうです（東京都労働経済局、1986）。組ひもを組みあげる組台には、四ツ台、丸台、綾竹台、高台など７種類あり（東京都労働経済局、1987）、学校で習ったのは丸台に近い道具を使うやり方であることがわかりました（写真５）。組台によって色々な組み方があり、ひもや糸と糸が交差する組目と色合いで美しさを表現していきます。組ひもは美しいだけでなく身体の動きに合わせて留める（縛る）ように着物の帯締めにも使われています。江戸時代中期にたびたび出た奢侈禁止令の影響を受けて、地味の中にも粋を好む気風から「わび」「さび」の要素を加えたより精緻なものへ発展しました（前掲、1986）。

結んである組ひもは、お守りと仏様に関わる場所で見つけたため、神社とお寺に行くことにしました。行き先と組ひもが使われていたところをまとめたのが表１です。神社では、鳥居やみすのところにも組ひもが使われていました（写真６、写真７）。また、お寺ではかねをつくときにしゅ木をふるひもが組ひもでした（写真８）。これらの神社やお寺の中から、池袋氷川神社の宮司さんと観明寺の副住職さんにお話をうかがうことができま

した。池袋氷川神社では、鳥居にしめ縄や縄で編んだ組ひもが使われている理由、みすのところに組ひもが使われている理由、そしてお守りに組ひもで飾り結びがつけられている理由について、質問しました。鳥居にしめ縄が使われていたり、組ひもが使われていることに特別な意味はない、縁起を重視しているということでした。みすに総角(あげまき)結びが使われているのも縁起によるそうです。また、結んだらほどけにくいことを神社では重視しているそうです。お守りは神様なので、神様と持ち主をつなぐ、結ぶことが大事で、お守りに吉祥(きっしょう)結びがなされているのは、見栄えがよい、神様と持ち主を結ぶひもがほどけない、さらに縁起からきているそうです。組ひもを使うのはすぐに切れることなく丈夫だからです。神社では、かみしもは左右対称、結び目はちょう結びにするなど、見た目も重視しているそうです。

観明寺では、組ひもが使われている仏具と、その理由を教えていただきました。組ひもは、袈裟の上に垂らす装飾用の修多羅(しゅたら)に使われていました（写真９）。衣が重いので修多羅でしっかり結びます。丈夫でほどけ難い理由から組ひもが使われているそうです。修多羅は、真言宗、天台宗、浄土真宗などで使われているということでした。修多羅結びは組ひもが複雑に編まれていて、中にお花の模様がありました（写真10）。これは地味の中に粋を取り入れている表れだそうです。修多羅は特別な時のみ使用するということでした。

ぼくは毎年お盆に母の実家のぼだい寺である最勝寺で行われる施餓鬼大法要会に行きます。近隣の天台宗のお坊さんが８人ぐらいきてお経を唱えながら供養をします。観明寺でお話を聞いて、あのときにお坊さん達が身に着けていたのが修多羅であることに気づきました。そこで最勝寺の住職さんにもお話をうかがいました。住職さんは、修多羅はお経であると教えてくれました。お経（仏様の教え）は織物の「たて（経）糸」にあたり、「よこ（緯）糸」は人間で、修多羅はその二つをつなぐ役割を持っているそうです。お釈迦様の教えを末永く貫くという意味もあるそうです。修多羅は色で階級を示しており、赤が最高で、次に紫、その他の順になります。修多羅にはいくつもの役割があることがわかりました。

組ひもは身の回りにあるものですが、これまで気にも留めてきませんでした。お守りは複数を並べてみるまで、組ひもに同じ飾り結びがされていることに気づきませんでした。また、お守りは神様と自分を結ぶものなので、ほどけないことと、見た目も大事であることを知りました。お坊さんの使う修多羅は仏様とぼくたち人間をつなぐもので、修多羅結びにはいまも粋な要素が取り入れられていることがわかりました。組ひもは、その丈夫さ

から、「結ぶ」や「つなぐ」という用途で使われることが多いけれど、組み方や結び方で、美しさ、粋、縁起などを表現していることがわかりました。このように見た目で何かを伝えているものにもっと注意を払い、理解していきたいなと強く思う機会になりました。

参考文献

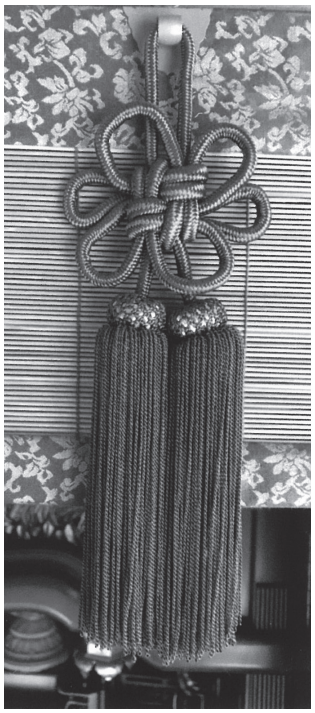
東京都労働経済局商工部繊維雑貨課（1986）『地域に息づく江戸の技　東京の伝統工芸品』、虹画社

東京都労働経済局商工部繊維雑貨課（1987）『自然の原材料と手づくりの妙　東京の伝統工芸品PARTⅡ』、山広印刷

表１　調べにいった神社とお寺と組ひもがつかわれていたところ

	訪問先	組ひもが使われていたところ
※８月13日、16日	最勝寺（茨城県）	幕：総角結び／修多羅
８月15日	羽黒神社（茨城県）	鳥居／お守り
８月15日	定林寺（茨城県）	幕：総角結び／しゅ木
８月16日	文殊院（板橋）	幕：総角結び
８月17日	氷川神社（氷川町）	鳥居
※８月18日	氷川神社（池袋本町）	みす：総角結び／お守り
※８月18日	観明寺（板橋）	修多羅

※はインタビューができたところ。最勝寺は８月19日に電話で実施した。

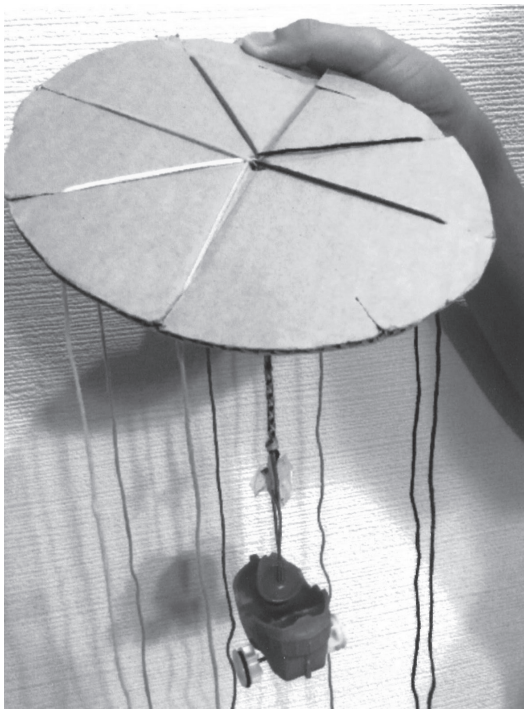


（写真１）仏壇前のみす

（写真２）お守り
両方とも組ひもに飾り結び

（写真３）お守り

（写真４）お寺にあった組ひも

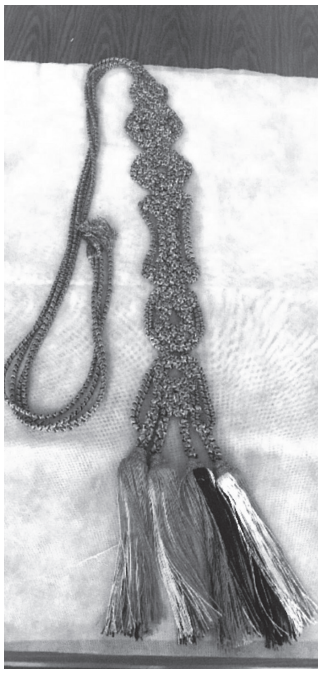


（写真５）ぼくの組ひも編み機

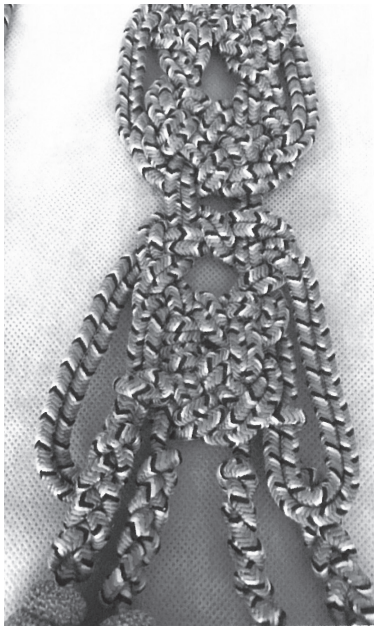
（写真６）神社で見つけた組ひも（鳥居の前）

（写真７）神社で見つけた組ひも（みす）

（写真８）しゅ木の組ひも



（写真９）修多羅



（写真10）修多羅結び

諏訪の御柱

板橋区立志村第四中学校２年　鈴木（すずき）　香芽（こうめ）

巨大な丸太に大勢の人がまたがり、急斜面を土煙を上げて滑り落ちていく。丸太から転がり落ちる人、必死の形相でつかまり叫ぶ人、それらを崖下から見上げる沢山の人々……。それが日本三大奇祭の一つといわれる長野県諏訪市の「御柱祭」だった。

私は小学生の時、長野県に住んでいた。小学５年生になったばかりの頃、地元のテレビ放送で連日取り上げられるこの祭りのニュースを見て、なんでこんなに危ないことをするのだろう？と怖かったことをよく覚えている。その頃の私には大人達が本気でお祭りをするという概念がなかったのだ。今思うと、命をかけている様な姿が恐しかったのだと思う。翌年の夏、家族旅行で諏訪市を訪れた。そしてこの旅行で私の「御柱祭」に対する考え方が変わる事となる。

まず、諏訪地方には近年「君の名は。」という映画のモデル地になったことで有名な諏訪湖があり、その諏訪湖の周辺に４か所の神社を持つ「諏訪大社」がある。この諏訪大社は全国各地にある諏訪神社の総本社であり、国内にある最も古い神社の１つとされているそうだ。その諏訪大社を奉るための巨木、それが御柱である。御柱になる事ができる木は樹齢150年を超えるモミの大木だ。その長さは約17メートル、直径約１メートル、重量は約10トンもあるという。４社ある諏訪大社それぞれの四隅に奉る為、計16本を厳選して山から曳き、それを境内に建てる一連の行いを「御柱祭」と呼び、７年に一度、約２ヵ月かけて行われるのだ。私がテレビで見た、急斜面を滑り落ちていくシーンはこの祭りのほんの一部に過ぎなかったらしい。旅行中、「おんばしら館よいさ」という御柱祭の資料館に立ち寄った。そこでは祭りに実際に使われた祭衣装や道具が展示されており、ミニチュアでの再現やビデオなどで御柱祭について深く学ぶことができた。御柱祭は、御柱の候補となる木を定める「仮見立て」という神事から始まり、最後に諏訪大社境内に御柱を立てる「建御柱」など全ての行程を合わせると、２年から３年掛かりとなる想像以上に大きな祭りだったのだ。御柱祭の正確な起源は分かっていないものの、平安時代にはその記述があるという。古事記に諏訪の神様の話が載っているため、実際はもっと古くから行われていたのかもしれない。

御柱祭は、氏子と呼ばれる地元の人々がいなければ成り立たない。彼らは地区ごとに担当する御柱が決まっており、何年もかけて準備をし、全エネルギーを注いでこの祭りに取り組むという。都市部へ出て行った若者たちも、御柱祭の年には地元へ戻ってきて祭りに

取り組んだり、地元の企業も祭り当日は会社を休みにしたりするなど御柱祭へかける思いがとても強い事に非常に驚いた。そして御柱祭の行われる年には、結婚式や家の改築などを控えるという独特なルールも存在するらしい。これは祭りに奉仕するために個人的な事は控えるという意味があるのだそうだ。いったいなぜ、御柱祭の為にそこまでするのか。また、御柱にはどんな力があるというのだろうか。

その後、私達は実際に御柱が奉られている諏訪大社を訪れた。大きな鳥居をくぐるとそれは突然現れた。実際に御柱を目の前にするとその迫力に圧倒された。幹の太さや木の長さはもちろんだが、御柱そのものの存在感がとても大きい。なるほど、これが御柱なのか。その幹はツヤツヤと輝いていて神秘的だと感じられるほどだった。境内には御柱の他にも樹齢を重ねた沢山の大きな木が葉を茂らせており、夏だというのに涼しい風が吹いていてとても清々しい気持ちになった。そこでは不思議と自分の悩んでいたことが小さく感じられた。その後も諏訪大社４社のうちの３社を回ることができ、それぞれの境内に奉られた御柱を見ることができた。御柱をなぜ境内の４か所に奉るのかという意味については諸説あり、その起源は古すぎるため、やはりはっきりとした事は分かっていないという。中国の四神説やトーテムポール説、結界説などの色々な説がある。私としては実際に御柱を間近で見て、結界という意味合いが一番強いのではないかと思った。どの境内も美しく守られ、とても安心できる空間であると私には感じられたからだ。

御柱を、諏訪大社を、そして諏訪湖を巡った旅行の中で、私は諏訪に住む人達がなぜこれほどまでに御柱祭に力を注ぐのか少し分かった気がした。海から遠く離れた盆地の中で、大きな湖を持つ諏訪地方。古くから続くこの御柱祭の伝統を守り、祭りに情熱を注ぐことで、地域の人達のつながりや自然の恵みへの感謝を代々つなげていくことができるのではないか。そしてその心が諏訪の神様に届き、この地を守ってもらっているのではないかと感じたのだ。御柱祭当日は付近の小学校も休みになるという。諏訪の人達は小さな頃からこの祭りの伝統を引き継いでいく者として育っていくのかもしれない。祭りを通して人と人とのつながりを感じながら成長する事が出来るのは、私には少しうらやましく感じられた。昔から「人を見るなら諏訪御柱」という言葉があるほど、地域の外から沢山の観光客が訪れる祭りの情熱は、目に見えない大きなエネルギーを生み出すのだと思う。そして祭りが終わった後、諏訪の人達は７年後の開催へ向けて用意を始めるのだという。

次回の御柱祭の開催は2020年だ。20万人もの観光客が訪れる為、近年では予約制で観客席を購入したり、駅前にパブリックビューイングが用意されたりするとのことだ。こうし

た時代の変化に柔軟に対応していることも、この祭りを長年続けることが出来る一つの要因なのかもしれない。そして私は、この荒々しくも美しい御柱祭がいつまでも続いてほしいと願うのである。

語り継ぎたいもの

桜丘中学校１年　小澤（おざわ）　慶騎（よしき）

「赤ちゃんは泣くのが仕事だから大丈夫」。僕の家は区の史跡「縁切榎」真横で日本蕎麦屋を50年近く営んでいる。度々うどんを離乳食にと赤ちゃん連れの家族が訪れるが、両親が食べている間に赤ちゃんが飽きてしまい泣き出してしまうことがある。両親は周囲を気にして必死に泣きやまそうとするけれど、逆に赤ちゃんが泣いてしまって慌ててしまう光景を目にする。冒頭の言葉は、そんな時に決まって祖父が慰める言葉だ。

今夏、令和元年最初の「終戦の日」を迎えた。テレビは各局「日本人が忘れてはならない４つの日－沖縄終戦の日、広島・長崎の原爆の日、終戦の日」を挙げていた。それを見ているうちにふとあることが気になった。東京をはじめとする大都市の空襲や、広島・長崎の原爆投下の悲劇に隠れあまり知られていないけれど、他の県や地域も実は多数の空襲戦災に遭遇し、沢山の死傷者がいたのではないか？小さな町や村、山や川、それらにも悲劇は訪れ、多くの物が奪われ、今なお多くの人が残された戦争の爪痕に傷ついているのではないか？なのにそれらはこのまま人知れず風化してしまうのではないか？

「どんな惨劇を経験しても、戦争を体験した人がいなくなると人はまた戦前に回帰する。人類は連綿とその過ちを繰り返してきた」

板橋第一小学校在学中の頃、総合学習の時間に戦争経験者の男性から伺った言葉が蘇った。

「敗戦から年月が経ち、近年は戦争体験者が減り続け、或いは高齢の為に若い世代の前で戦争を語ることが難しくなってきている。戦争体験者の生の声を聞くことが戦争風化の抑止に繋がるのに、なかなかその声を届けることができないことが申し訳ない」

と悔恨された姿を思い出し、終戦から74年経った今だからこそ、僕達は改めて戦争が残した凶悪な爪痕・犠牲・苦難を実際の体験の有無にかかわらず意識し、記憶にとどめる努力を怠らず、また語り継ぐ必要性を感じた。

そこでまず僕は1936年生まれの83歳、戦時中は僕と同世代で、戦時下の日常を生き抜いてきた祖父に記憶を掘り起こしてもらうことにした。

祖父は北関東最大の都市であり随一の商工業都市でもある栃木県宇都宮近くの下都賀郡壬生出身。祖父の話によると、当時宇都宮には宇都宮陸軍飛行場や飛行学校、東洋一といわれ陸軍機を専用に組み立てていた中島飛行機の工場があり、これらは東京の防衛を担っているとアメリカ軍に重要視されていたそうだ。

ところで僕が今まで読んだ戦争体験記や絵本には、食料不足を補う為、学校の校庭を潰

して畑や農場にしたとあったので、祖父の学校もそうだったのか尋ねると
「校庭には戦車がズラリと並んでいた」
と予想外の答えが返ってきた。不思議がる僕に
「壬生には飛行学校があって、そこを狙って絶えず戦闘機が飛んできては機銃掃射があったから、地上から敵戦闘機を迎撃する為に配置していた」
と教えてくれた。この飛行学校こそ特攻要員を養成していて、ここで訓練を受けた特攻隊員は知覧に神風特攻隊として配属、みんな帰らぬ人になったと静かに祖父は語った。

そして話は、空襲下に移る。

戦況が悪化してくると授業の時間は全て校庭で兵隊になる為の軍事訓練が行われた。そこをめがけて戦闘機による一斉機銃掃射が始まる。訓練は上半身裸に短パンで行われていたが、上着を着る余裕など当然無く、隠れる所も無い中、低空飛行をしながら激しい機銃掃射をする戦闘機。爆弾が雨のように次々と落ち地響きが絶え間なく続き、その中を祖父達は防空壕にただただ走って逃げたという。話を聞くだけで僕は怖くて心臓が痛くなったから当事者の祖父はさぞ怖かったことだろう。が、
「何度もそんなことがあったから怖いなんて感情は麻痺して何とも思わない。とにかく逃げることだけに必死だった」。

そして宇都宮大空襲が昭和20年７月12日の深夜に開始された。寝ていた祖父は、
「空襲だ！！起きろ！！」
家族から起こされ、空襲警報がけたたましく響く中、防空壕に走る。かなり低空に敵機が飛んでいたのか真っ暗闇で何も見えないのに頭上から爆音が大地を揺らしてうなり、今にも頭上に焼夷弾が降ってくるかもしれないと走るスピードをあげても、足がもつれて真っ直ぐ走れず、やっと辿りついた防空壕に飛び込めば中はあつくて狭く息苦しい。赤ちゃんは泣き声が外にもれないよう口を押さえこまれていた。ここまで聞いた時、何故祖父が赤ちゃんの泣き声が聞こえるうちは大丈夫と言うのか、その理由が少しわかったような気がした。

延々と続いた爆音が止み静けさを取り戻し防空壕から出て宇都宮方面を見れば、真っ赤に火を噴いた無数の焼夷弾が雨のように降り巨大な火柱が噴き上がり、一帯は火の海、燃えさかる朱色の炎。突然現れた爆撃機や戦闘機や焼夷弾で街は焼かれ、集落は破壊され、逃げまどう市民は狙い撃ちされ、800人近くが犠牲になった。祖父は今でもあの朱色の明るさが忘れられないという。

祖父が語ってくれた敗戦の悲惨さは想像以上で、今まで考えていた戦争の生ぬるさを思

い知らされた。

令和という新しい時代を受け継ぐ僕達は、戦争を過去に起きたものとせず、そこから学び、平成からの不戦を後世へと繋がなければならない。戦禍を語って下さる人が減少してもインターネットや映画やテレビや本から理解を深めることは可能だ。見て聞いて、歩いて調べて考える。そうやって不戦の意志を語り継ぐことが今を生きる僕達の責任だと思う。

僕の住む板橋区は昭和60年に平和都市宣言をして以来、平和の尊さ、戦争の悲惨さを訴え続けている。その活動の一つに祈念マップがある。それを手にめぐってみると小さい頃から遊んでいた場所が実は軍事遺跡だったと知り驚いた。何気なく通りすぎてしまう場所にも歴史はあり、見ようと思えば見えてくるものがある。その見ようとする意識が大切なんだと感じた。

軍事遺跡の保存は難しく壊されていくと新聞で読んだが、板橋区の軍事遺跡は都内初の史跡公園になるというからありがたい。こうしてまた戦争の遺産に触れることで、不戦の大切さを語り継げるのだから。

大好きな上野動物園のモノレール

板橋区立蓮根小学校６年　大竹（おおたけ）　涼介（りょうすけ）

ぼくは上野動物園によく行きます。動物を見る事も大好きですが、それと同じくらい園内にあるモノレールに乗る事も大好きです。モノレールは11月に運行休止になる事が決まっており、とても残念に思っていました。そこでぼくは上野動物園のモノレールの歴史について調べて見る事にしました。

上野のモノレールの正式名称は「東京都懸垂電車上野懸垂線」といいます。東園駅と西園駅の２つしか駅はありませんが、動物園の遊具的な乗り物ではなく、鉄道事業法に基づく交通機関で東京都交通局が運営しています。２両編成で定員は62人です。入口で係員さんが手持ちのカウンターで人数を確認しながら駅の中に乗客を入れてくれます。

昭和32年12月17日開業で日本初のモノレールです。営業距離は300メートルで日本最短のモノレールでもあります。駅間の所要時間は約1分半です。なぜこんなに短いかというともともと実験用として作られたからだそうです。当時は自動車がどんどん増えてきた事で同じ道路を使っている交通の主流だった都電の運行が難しくなっていました。そこで都電に代わる交通手段としてモノレールや地下鉄が検討されたそうです。世界初のモノレールであるドイツのヴッパータール空中鉄道を参考にして上野懸垂線が作られました。検討の結果、輸送力にすぐれた地下鉄の方が整備される事になったそうですが、モノレールがたくさん走っている東京の街も見てみたかったなと思いました。

モノレールはレールにぶら下がる懸垂式と、またがるこ座式の大きく二種類に分かれています。上野懸垂線のように車両が片側のアームだけでぶら下がる懸垂式のモノレールは日本には他にないため「上野式」や「東京都交通局式」などとも呼ばれているそうです。最初の車両はＨ形といい昭和41年11月まで約９年間使われていました。車両を製造した日本車輌でまだ保管されているそうです。２代目はM形といい昭和59年８月まで約17年間使われていました。M形は引退後しばらく板橋区の志村車両検修場に保管されていました。３代目は30形といって平成11年12月まで約17年間使われていました。車体にパンダのイラストが大きく入ったデザインになっています。現在は４代目の40形が平成13年５月から使われています。車体の横だけではなく下にも様々な動物のイラストがありとてもカラフルなデザインです。

M形から30形に代わる時、30形から40形に代わる時、そのどちらの時にも実験用としてはもう役目を果たした事や東京都の財政面の理由などから廃止が検討されたそうです。た

だモノレールは上野動物園の名物として人気も高く、存続を希望する声も多かったのでどちらの時も存続する事になったそうです。車体のデザインがどんどん子どもが喜ぶようなものになっている事などからも、実験用からみんなに愛される乗り物へと変わっていった上野懸垂線の歴史を感じる事ができました。

今回の休止後も車両の更新がされるかどうかはまだ検討中だそうです。今年の夏休みもぼくは上野動物園に行って、上野懸垂線にも乗りました。暑い日でしたが、駅には長い行列ができていて大人気でした。もうすぐ乗れなくなってしまうと思うとすごく悲しい気持ちになりました。ぼくは５代目の車両が上野動物園を走る姿をいつか見る事ができたら、そして乗る事もできたらいいなと思っています。

【参考文献】

『都営地下鉄・都電・都バスのひみつ』PHP研究所、2014年

『都営交通をゆく』イカロス出版、2019年

『都営交通の世界』交通新聞社、2017年

【参考HP】

『東京都交通局』

『毎日新聞』

『東京の地下鉄を見続けてきた』

『休止間近！「上野動物園モノレール」が担った“意外な役割”IT mediaビジネスONLINE』

『乗りものニュース』

馬頭観音さん、見ていてくれてありがとう

板橋区立板橋第五小学校４年　日原（ひはら）　純佳（すみか）

私は、学校の近くにある石像が不思議で仕方ありませんでした。なぜかというと、もう顔も体もほとんど削れているのに、屋根を付けて、家の塀も切ってまで道路に向けておいてあるからです。時々お花も飾ってあります。この石像が何なのか、そして、どうしてこのくらい削れているのにここに飾ってあるのかをしらべました。

直接、石像があるお家に取材をしにいく前に、この石像がなんなのか、図書館や公文書館に行って調べました。そうすると、この石像は「馬頭観音」という観音さまだということがわかりました。馬頭観音とは、頭に馬の顔を付けている観音さまで、馬を供養するためのものだったそうです。

昔から馬は供養するほど日本人にとって生きていくために必要で、大切なものであったこともわかりました。３世紀から６世紀の古墳時代に馬の形のはにわがたくさんつくられていたそうです。そのころは日本に馬がいて、旅行の時に荷物を運んだり、田んぼや畑をたがやしたりして、人間の力となって働いていたときでした。

板橋区でも、江戸時代に馬頭観音が多く建てられています。今、確認されているだけでも板橋区内に50体以上あります。川越街道や中山道というその頃の主要な道があり、畑も多かったことが多く建てられている理由だそうです。馬頭観音の他にも、わらで作ったマコモ馬づくりの行事があったりするなど、板橋で馬はとても身近で大事な存在だったことがわかりました。

どういう場所に馬頭観音があるのか、本にのっている住所から、地図に書き出してみました。一緒に、昔の川越街道と、中山道を今の地図に書いてみました。そうしてわかったことは二点ありました。

一点目は、中山道や川越街道（旧）の近くにあることです。これは、旅の道中で亡くなった馬を供養するための馬頭観音だと考えました。

二点目は、お寺にも多くあることがわかりました。お寺で作った物なのかはわかりませんが、畑で使われていた馬を供養するためのものなのかなと考えました。

このように、資料から近所にある石像が馬頭観音であることや、馬頭観音が大事にされていた理由がわかりました。直接、石像が置かれているお家の方に話を聞いてみたいとおもったので、中丸中町会の会長の松本さんに紹介してもらい、詳しい話を聞いてみました。それから、町会の記念誌にものっていたので、それもあわせてみてみました。

そのお家の方は田中さんという方で、先祖代々馬頭観音の持ち主だということでした。この馬頭観音は昔、お百姓さんだった頃に、農業の働き手だった馬のためのものということでした。1833年に造立されたのですが、実は、昔から今の場所にあったわけではないそうです。昔は、家の敷地内にあったのだけれども、この石像をどうしたらいいかと西光院というお寺に相談しに行ったそうです。その時に、お寺の住職さんが、「では、みなさんのみえるところにいどうしたらどうですか。」と提案があって、今のような塀を切って置いてあるそうです。お話を聞いてみた結果、田中さんのお家の馬頭観音は住職さんの意見で置いていることがわかりました。

その住職さんはもういないのでお話は聞けませんが、道路を通る人にみてもらうために、いまの場所においたのだとおもいました。

田中さんの敷地内にあったら私も馬頭観音に興味を持たなかっただろうし、観音さまも、小学生が通る通学路になっている場所においてもらったことで、自分が道を守る仕事ができてうれしいとおもいます。それから、田中さんのご先祖様が馬頭観音をどうしたらいいかお寺に相談しにいったということから、地図上にお寺の回りに馬頭観音があることもなっとくできました。家にある馬頭観音をどうしたらいいか持ち主がお寺に相談しにいき、渡したのだと思います。

私は、馬頭観音のことをしらべて、馬が板橋区の人とかかわっていることや、大事にされていたことを知りました。そして、今もいろんな人がとても大切にしていることを知り、いろんな人にもっと馬頭観音のことを知ってもらいたいとおもいます。

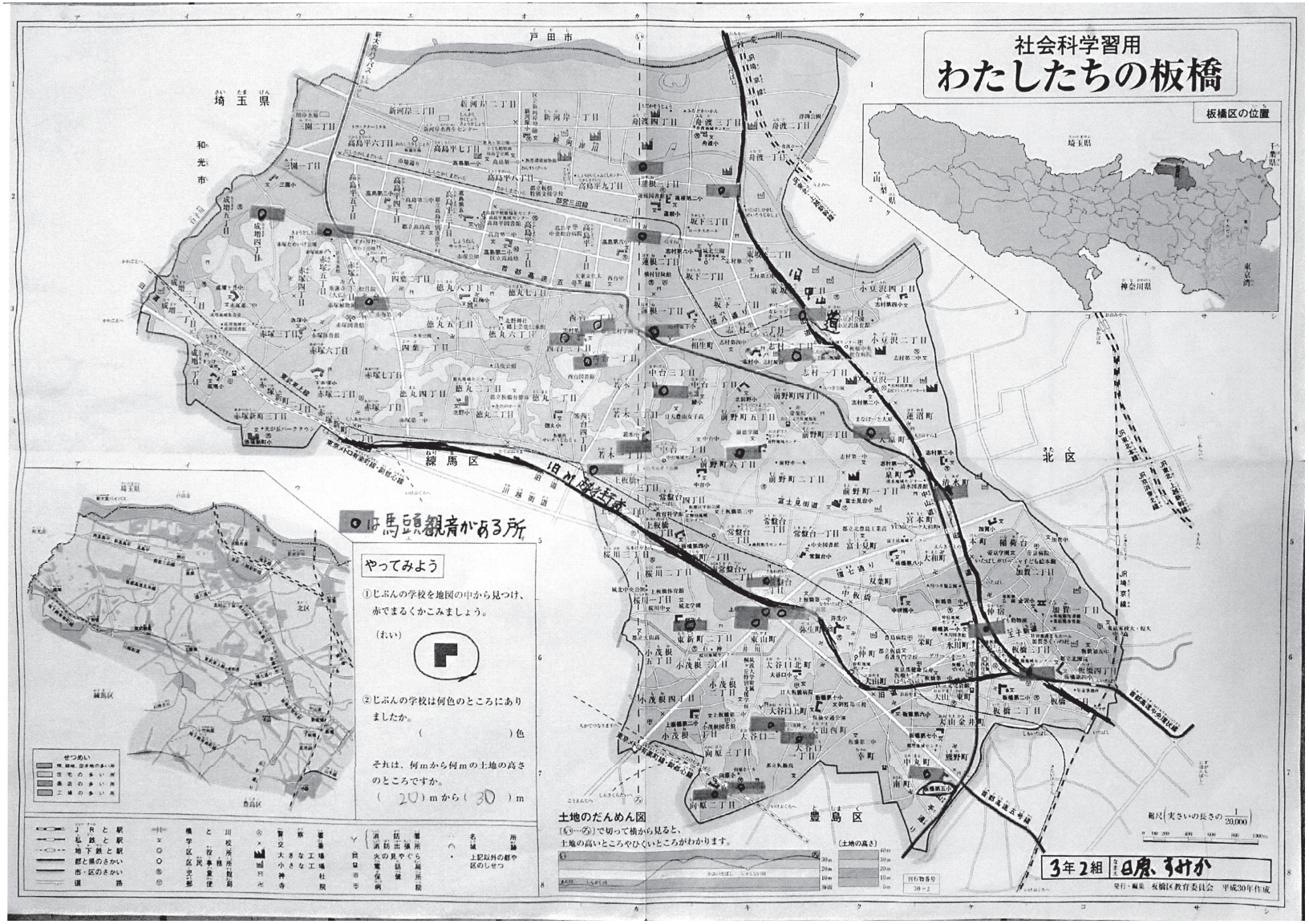
参考文献

『板橋と馬』板橋区立郷土資料館、2014年

『馬はともだち』（まんが社会見学シリーズ３）、
講談社、作鈴木俊行、絵野本トロ、2013年

『中丸中町　50周年記念誌』
中丸中町記念誌発行委員会、2007年

『石仏』文化財シリーズ第79集、いたばしの石造文化財
その四（改訂版）、板橋区教育委員会、1995年


社会科学習用
わたしたちの板橋
板橋区の位置
埼玉県
千葉県
東京湾
神奈川県
戸田市
和光市
練馬区
北区
豊島区
荒川区
中山道
川越街道
は馬頭観音がある所
やってみよう
①じぶんの学校を地図の中から見つけ、赤でまるくかこみましょう。
(むい)
②じぶんの学校は何色のところにありましたか。
( )色
それは、何mから何mの土地の高さのところですか。
(20)mから(30)m
土地のだんめん図
(A…D)で切って横から見ると、土地の高いところやひくいところがわかります。
縮尺(実さいの長さの 1/20,000)
3年2組
日恩すけか
発行・編集 板橋区教育委員会 平成30年作成

※ は馬頭観音がある所

倭城について

開智日本橋学園中学校２年　村山（むらやま）　悠和（ゆうな）

皆さんは順天倭城を知っていますか。この城は慶長の役の時に、西部戦線において朝鮮軍に対抗するための城が必要となり僅か２ヶ月という突貫工事で作られました。また、この城は倭城の中でも規模が大きく、保存状態が良いにもかかわらず、ほぼ無名に等しい城です。そのため私は、順天倭城がどのような城なのかを知るためにこの夏見学しました。その際に、順天倭城の資料の「征倭紀功図巻」（以下、図巻と呼称）という絵を見ながら見学しました。

まず、順天駅からタクシーで20分程度で外郭ラインにつきました。外郭ラインの史跡の保存状態も良く、石垣などが各所に残っていることが確認できました。また、周りには坂が多く、川もあってとても攻めづらい地形だと思いました。しかし、外郭ラインには畑や民家が多いため詳しく観察するのは難しかったです。

次に詰めの城を見学しました。造りを大まかに説明すると、大空堀→虎口一→虎口二→本丸虎口（桝形）一→本丸虎口（桝形）二→天守となっています。また、虎口二から別の道を通って虎口三に行き、そこから天守に行くことも可能でした。

まず、最初の防衛設備である大空堀は深く、幅がとても広くて、約20～30メートルくらいありました。

次に本丸虎口一は桝形の門となっており、防衛に優れていました。また、図巻にも櫓門として描かれていました。また、横矢がかかる折れもありました。

この虎口を抜け、Uターンすると本丸虎口二が見えてきました。それを越えると天守台が見えました。構造としては大型櫓と同じでしたが、海上から天守台を見ると、威容を示していました。また、虎口三も規模がそれなりに大きく、近くに曲輪があることからそれなりに身分の高い人がいたのではないかと思いました。

私は順天倭城を見学し終わった後に順天の観光案内所に行き、順天倭城の整備などについて質問をしました。すると、順天市の教育委員会は順天倭城に関しては、あまり興味がないという立場だということを教えてくれました。

私は後日に韓国国内でも有数の広さがある書店を何度か訪れました。そこで、順天倭城や倭城の本はないかと聞いたところ、全ての本屋で共通の一冊以外はなく、おどろきを受けました。

帰国後に調べてみると、韓国国内で倭城に対する関心はゼロに等しく、倭城の整備もあ

まりしていなかったり、破壊されていたり、公園になっている場所が多いそうです。過去には日韓歴史共同研究委員会というものもあったそうですが、互いの見解や認識の違い、研究したいものの違いなどがあり、日韓の共同研究はあまり進んでおらず、倭城研究はほとんど何も進んでいないのが現状です。私はこの現状を現地で体験し、日韓関係が悪くなっている今だからこそ、日韓共同の歴史研究を行い、互いの認識の違いを解消することが、倭城研究や史跡の保存につながる第一歩なのではないかと思いました。

板橋の文化財－祭り囃子－

板橋区立弥生小学校５年　髙林（たかばやし）　瑚々奈（ここな）

私は２年生の秋から祭り囃子を教わっています。最初は先に始めた友人に誘われて体験に行ったのがきっかけです。ピアノを習っているので楽譜は読めますが、初めて見たお囃子の譜面は「スッ天」「コリャ」という風にカタカナと漢字で書かれていて、むずかしそうに思いました。でもお祭りでみんなが山車を引く中、トラックの荷台で太鼓をたたいている友人を見てやってみたいと思いました。３年経ち、演奏できる曲目も増え、どうせならお囃子のことをもっとよく知りたいと思ったので、お囃子の先生に聞いた話や去年もらった60周年の資料などで調べてみました。

まず、これまで考えたこともなかった「囃子」という言葉ですが、元々引き立てるという意味の「映える」を昔「映やす」と言っていて、おみこしを引き立てるところから漢字を当てて「囃子」というようになったそうです。そしてその「囃子」が、「大声でほめたたえる。からかって騒ぐ。」という意味の「はやす」「はやしたてる」という言葉の語源になったそうです。

次に、私が教わっているのは神田流弥生囃子という神田囃子です。明治初期に神田多町で建具職の修業をしていた上板橋宿（現弥生町）の石田滝蔵によって伝えられました。弥生町の万福寺にある石田家の墓碑に多くの囃子連の名が刻まれていて、当時の神田囃子の広がりを知ることができると知り、行ってみました。今まで家からも近い所にあり、何度も通っていた所でした。

石田滝蔵の直弟子である栗原佐吉などにより大正13年「囃子連共睦会」が発足し、現在の祭り囃子の基礎を築きました。戦時中は途絶えていましたが、昭和33年に近隣の子供達に指導すべく、保存会を設立しました。昔は車もないので、太鼓を担いで教えに行っていたそうです。また、昔は娯楽がなく、食べ物やお酒が出る祭りは娯楽であり、太鼓を教わる人も多かったのかも知れません。そういった神田囃子の継承や祭礼等地域への貢献が認められて板橋区民俗無形文化財「祭り囃子（神田囃子）」の指定登録を受け、現在も私達の先生が受け継ぎ、指導や活動など熱心にして下さっています。

ところで、お囃子は５人編成で、内訳は締太鼓（しらべ・しらかわ）が２、大太鼓（おおかわ）、笛（とんび）、鉦（よすけ）が各１となっています。雅楽の本によると、日本のひな人形の「五人囃子」から分かるように、宗教的かつ儀式的・貴族的な音楽として「雅楽」があります。平安時代末期に朝廷に仕えた官人（さむらい）達が各地で武士となり、

鎌倉時代では太鼓・笛・鉦などが武士のたしなみとして奏でられ、雅楽と対の「俗学」として庶民にも広がり現代の祭り囃子として受け継がれてきました。お囃子の演目には「屋台（やたい）」「聖天（しょうでん）」「鎌倉（かまくら）」「仕丁目（しちょうめ）」「屋台」の順に演じられるのが普通です。「仕丁目」というのがありますが、まさに雛人形の５段目にいる仕丁のことで、平安時代以降に貴族に仕えた雑役です。また、「聖天」は「昇殿」とも書き、平安時代以降に家格や功績によって宮中の殿上の間に昇るのを許されることを言い、つまり、ひなだんにいる人たちのことだそうです。この２つの演目は俗学ではなく雅楽でありながらも、現在は祭り囃子として伝承されているのだそうです。このことから祭り囃子は元々身分の高い人々の音楽だった雅楽が庶民の娯楽になったことが分かりました。

私が教わっているお囃子の先生は、中高生や社会人になるとなかなかけいこに来られないけれど、そこでやめてしまうのではなく、お祭りだけでも来てほしいと言っていました。

私は何年もお囃子を習っているのに、全く考えたことがなかったので知らないことばかりでした。けれど、今回お囃子についてさかのぼると平安時代の音楽からきていること、長い時代を経て大正時代、昭和時代に広めたり、平成時代に子供達へ伝えたりしてきたから今のお囃子があることを知りました。最初はタイヤを使って締太鼓のリズムを練習して、締太鼓を叩けるようになり、締太鼓を覚えたら大太鼓、鉦と教わる物が増えていき、３年経って今やっと笛を教わり始めました。笛は譜面もなく耳で聞いて覚えないといけないから難しいと先生が言っていた通りで、音の出し方も難しいけれど、笛を教えてもらえるようになってさらに楽しいです。先生の思いを聞いて、これからも頑張ってもっとうまくなりたいし、この先忙しくなっても先生が言うように、お祭りで演じたりして続けていきたいです。令和になった今は私の同級生が多く、低学年も合わせて11人が教わっています。子供だけではなく、50代や80代の人も教わりに来ているので、一緒に練習しています。このように年令も関係なく一緒にできることも魅力だと思うので、これからもたくさんの人が興味を持ってくれると良いなと思います。

おばあちゃんが体験したこと

板橋区立板橋第五小学校４年　石山（いしやま）　咲希（さき）

私のおばあちゃんが生まれたところは、沖縄です。おばあちゃんが小学３年の時、1959年６月30日10時40分ごろミルク給食（当時、アメリカ軍から支給された脱脂粉乳のミルク）の時間に米軍のジェット戦闘機が、突然おばあちゃんが通学していた宮森小学校（旧石川市）に墜落炎上しました。一瞬の内に学童11名、近隣住民６名、事故の後遺症で１名（おばあちゃんと同居していたいとこ）の尊い命がうばわれ、220名のけが人を出す大惨事となりました。

その当時、沖縄はアメリカに支配されていたので、事故の事は日本のマスコミにも知らされずその事故を知らない人が60年たった今も多いようです。

事故の時おばあちゃんは次のじゅ業のためえんぴつをけずっていたそうです。その時窓の外がまっ赤になってばくげき音が聞こえ、なにがおきたのか分からなかったそうです。外へ飛び出すと火の粉が飛び散り、窓ガラスが割れ、その上を必死に逃げたようです。でもどの道をどうやって家にたどりついたのか、今だに思い出せないようです。

おばあちゃんは、足の親指を少し切ったくらいですんだのですが、いとこは50％の大やけどをして生死をさまよいました。一命はとりとめたものの、大学２年生の時、やけどのひふが発汗できず、後遺症が原因で亡くなりました。

毎年６月30日になると宮森小学校の子ども達も参加して、慰霊祭が行われているそうです。

しかし、今でもアメリカ軍の飛行機は、沖縄の空を飛んでいるので、おばあちゃんは飛行機を見ると、その事故の事を思い出し、これ以上おこってほしくないと願っているそうです。アメリカ軍の基地の多い沖縄は、事件や事故がひんぱんにおこっています。

私は、おばあちゃんがその事故を忘れてほしくないためにいろいろな人にその事故のお話しをしたり、記事を書いている事を聞いてすごいなあと感心しました。

もし私がおばあちゃんの立場だったらこわくて逃げられなかったかもしれません。

最後に感じたことは、これからも日本は、平和であってほしいと思います。

いたばしくの農ぎょうについて

板橋区立緑小学校３年　田村（たむら）　茉凜（まり）

わたしは、家ていさい園できゅうりなどの夏野さいを作っているので、いたばしくの農ぎょうについて調べてみたいと思いました。

いたばしく公文書館に行き、し料を見たり、しょくいんの方のお話を聞いてきました。

いたばしくは、えど時代から野さいのたねを作っていて、「たねだんす」というたねをほかんするたんすで、たねをはかり売りしたり、売り歩いたりしていたそうです。

明（めい）じ42年（1909年）の記ろくによると、いたばし地いきの農ぎょうは、水田とはた地に分けられます。水田の大半はとくまる・赤つか田んぼに代表され、はた地では、かく村の高（こう）地に野さいがさいばいされました。

いな作は、赤つか村・し村がおもになっていました。はた作は、上いたばし村・いたばし町・赤つか村・し村の台地で行われていました。

なかでも大根は、ねり馬大根に代表されるように、いたばしのとくさんで、生（なま）大根のほかつけ物として東京市（し）中に出かされました。大根のほかにいたばし町のごぼう、し村根葉（ねっぱ）のしょうが、はす根のやつがしらなどがあったそうです。

東京市中からひ料としての下（しも）ごえをはこんで、いたばし地いきからは、はた作を中心としたさいばい物（ぶつ）をはこぶことにより、東京の台所として大きなやくわりをはたしていました。

高（こう）どけいざいせい長（ちょう）きにいたばしくの農ぎょうは大きくへってしまいました。それでもいたばしくは、東京の中心部の中では今でも農ぎょうがさかんです。今でも大根が一番多く作られ、じゃがいも・キャベツ・さつまいもなども作られています。

また、赤つか・とくまる地いきには、くみんがり用できる「くみん農園」もあります。

いたばしくは、今もむかしも農ぎょうができるかんきょうがあるということがわかりました。

東京で農ぎょうが行われていない地いきもあるそうです。でも、わたしたちは自分のすんでいる地いきで作った野さいを食べることができます。学校のきゅう食でも「いたばしふれあい農園きゅう食会」の日があり、いたばしくで作った野さいを使ったきゅう食を食べることができます。

これからもいたばしくで作られた野さいが食べられるように、いたばしくでの農ぎょうがつづくといいなと思いました。

せいれい流し

板橋区立板橋第五小学校３年　本間（ほんま）　梨々華（りりか）

「ゆっくりゆっくり行けや。みんなに見守ってもろて、よかったなあ、ばあちゃん。」

私のおばあちゃんは、新がた県の佐渡市に住んでいて、毎年お盆がある８月に遊びに行きます。おばあちゃんが住む地いきでは、８月16日に、ご先祖様を、天国へ帰す“せいれい流し”があります。ワラで舟を作り、仏だんにお供えした物の他に、みやげ団子をのせてまずは、その場でもやします。たく山もえればもえるほど、ご先祖様はよろこんでいるそうです。あるてい度もやしたところで、近くの小川に落として、流れていくのを見守ります。今回は私たち家族もいっしょに見送ることができたので、

「仏様がよろこんでるのか、名ごりおしそうだよ。」

と、おばあちゃんが言っていました。送り出している間、家族が交代でかねを鳴らし続けます。その音は、なんとなく、さみしい気持ちになりました。私は、おそなえしてあった、ナスとキュウリの馬のような、生き物みたいな物が気になって、調べてみたら、キュウリは馬でしょうりょう馬とよび、ご先祖様がそれに乗って少しでも早く家に帰ってこれるようにする、ナスは牛でしょうりょう牛とよび、天国に帰る時にたく山のにもつをのせなきゃいけない、少しでも長く私たちがいるこの世にいてもらいたいから、牛に乗ってゆっくりと帰ってもらうためだそうです。ナスとキュウリを使うのは、夏のしゅんなやさいなので、おそなえ物として、よく合うそうです。おばあちゃんの家の牛や馬のやさいは、90度に曲がっていて、いつも、本物のように見えます。スーパーでも見たことがありません。朝市でいつも見つけてくるそうです。

私のお父さんが子どものころは、べつの地いきに住んでいたので、せいれい流しも、本かくてきだったそうです。木で舟を作り、ほをつけて、おそなえ物、牛、馬、みやげ団子をつみ、それを泳ぎながら、沖まで流しに行ったそうです。その沖は、大きい船がうかびそうなくらい、とても遠いので、もし私だったら、と中でつかれて、もどってしまうかもしれません。私たちが新がたから佐渡へわたる時のカーフェリーのように、しっかり作らないと、もしひっくり返ったら、ご先祖様も帰れなくなってしまうんだなぁと、ふと思いました。

今は、かんきょう問題で、海に物を流してはいけなくなったこと、舟を作る人がへってきているので、かんたんな方法ですませるようになってきているそうです。夏休みはおはかまいりだけではないんだなと思いました。

そもそもお盆ってなんだろう、お盆について家族で話し合いました。私たちがいるのはご先祖様のおかげで、ご先祖様がいなければ私たちは家族や友だちに会えないどころか、生まれてもいないんだと知って私は、ご先祖様に感謝をしなければならないのだと思いました。

私が大きくなってかんきょうがかわっていっても、なるべく今のやり方をくずさないように工夫して、毎年気持ち良くおむかえをして、家族みんなで見送りができるようにしたいです。

①ワラで盆舟を作る。

②盆舟に盆花をのせる。

③盆舟にお供え物やみやげ団子をのせて、その場でもやす。

④盆舟を小川に流す。

⑤かねを鳴らしてご先祖様を送る。